

ギリシアやインドに発生した古代原子論を、アリストテレスの『形而上学』を参照しつつ考えなおしてみると、その原子の概念とは、現代物理学における素粒子のような窮極の物質的実体であるというよりは、イノチあるモノを対象にした「個々の生命体というシステム」を含むより広い概念だったのではないだろうか。さらに、現代へ至る原子論成立の歴史をたどってみれば、ライプニッツの单子論を例とするように、古代の原子論やアリストテレスの形而上学の、近代科学の成果に基づく「読み換え」が行われていることに気づく。さらに、20世紀の初頭には、現代ではあたりまえのボルツマンの分子運動論をはじめとする現代原子論にたいしては、原子とは単に仮説された形而上学的実体にすぎないのであり、物理学者の根も葉もない空想である、というマッハをはじめとする認識論者からする強烈な批判が多々あったことにも気づくのである。『論理的原子論』は、こうした現代科学技術を取りまく混沌たる思想状況を背景として登場したのであり、ここに、現代科学技術分野における生命論が直面する諸問題、とりわけシステム医科学という最新の科学技術分野に課せられた諸問題を解く鍵があるのではなかろうか。今、多くの科学技術分野を結集すべきシステム医科学の共通の基礎となる方法論、特に、今急速に発展を遂げつつある生命情報科学の基礎でもありうる「統合的な論理（ロゴス, logos）」が真に求められているのではなかろうか。そうした現代のロゴスの一つとして「論理的原子論（logical atomism）」をとりあげ、その創始者であるラッセル、ウィトゲンシュタインの論理的方法を概観し、その着想の基本にあったと想定されるライプニッツの单子論（La Monadologie）のうちの特に生命論に関連する部分を比較対照しつつ、その生命情報科学基礎論、特にシステム医科学基礎論としての可能性について論じる。